

深い児童理解に基づき、一人ひとりを温かく励まし 自信と有能感を育む支援を

言われたことにはしっかりと取り組むが、自分で考えることが苦手という声を学校現場でよく聞く。学ぶことの楽しさを味わい、自ら学ぶ子どもは、どのような指導によって育つのか。

教育心理学を専門とする筑波大学院の外山美樹准教授と、東京都港区立芝浦小学校の黒田泰正校長に、ベネッセ教育総合研究所主任研究員の邵勤風が聞いた。

筑波大学院人間系准教授

外山美樹

とやまみき◎筑波大学院博士課程心理学研究科中退。博士（心理学）。専門は教育心理学。教室環境（友人関係、教師との関係、教室環境など）が子どもの動機づけに及ぼす影響や自己認知について研究。著書に『行動を起すし、持続する力―モチベーションの心理学』（新曜社）、『やさしい発達と学習』（有斐閣）など。



●主体性とは何か

主体性の土台となるのは豊かな感性や情操

邵 本日は、子どもの主体性を育てる上で大切なことを、理論と実践の両面からうかがいたいと思います。まず、各調査では、以前に比べて家庭学習時間が増加したという結果が出ています。これは、子どもたちが主体的に学ぶようになってきたといえるのでしょうか。

黒田 本校でも、子どもの学習時間が増えていると感じます。「確かな学力」を育てるといふねらいの下、きちんとした学力を身に付けさせようという意識が、学校にも保護者に

もあるからだと思います。ただ、決められた時間に与えられた課題に取り組む、言われるままに習い事や塾に通うような状況では、主体性は発揮しにくいものです。指示に従い真面目に取り組むのは良いことですが、自分もっと知りたいと思ひ、自分で時間をつくって取り組む力はあまり育っていないようです。

外山 子どもが学習に向かう理由はさまざまですが、「教師や保護者に褒められたい」「良い成績を取りたい」という「外発的」な意欲が比較的高まっているのに対し、「分かる」とは面白い」「新しいことを知りたい」という「内発的」な意欲が低くなっていると感じます。私が普段接する大学生も、課題はしつ

かりこなす半面、自分でテーマを探すことは苦手な「指示待ち」の傾向が見られます。

邵 そのような子どもの背景には、どのような環境の変化があるとお考えですか。

黒田 少子化により、昔に比べて保護者が子どもを大切にし、手を掛けていることがあると思います。また、最優先すべきは安全ですが、少しの危険や失敗から子どもを遠ざけるために「管理」する傾向がある環境では、子どもは自分の判断で行動したり勉強したりしにくくなっていると思います。

外山 保護者が一生懸命に頑張るあまり、過干渉や過保護になるケースが見られます。受験の影響もあるのですが、いかに学ぶか

主体的に学ぶ力を育む——学び方の工夫で学習意欲を高める

より、いかに良い点数を取るかに目がいく保護者が少なくないようです。

黒田 子どもが焦っていないならば、保護者も焦る必要はないと思います。小学生の頃は、自然の美しさに感動するなど、豊かな感性を育てる時間を十分に取ることもとても重要だと思います。

外山 その点は私も同感です。主体的に学ぶためには意欲が不可欠ですが、それは感情的な要素であり、知育だけではなく感性や情操を養うことから生じます。「どうして紅葉はこんなに美しいのか」と思う感性がなければ、興味や疑問は生まれません。一見遠回りのよ



東京都港区立芝浦小学校校長

黒田泰正

くろだ・やすまさ ○東京都の公立小学校教諭、大田区立館山養護学校教頭、大田区立千鳥小学校副校長、大田区立高畑小学校校長を経て、2009年から現職。
東京都港区立芝浦小学校 ○「児童が学ぶ喜びと、誇りをもてる学校」「保護者・地域の人々と共に歩む学校」を目指し、教育活動の充実を図る。「豊かに表現し、創造できる子供の育成」をテーマに算数科の研究に取り組む。児童数706人。

うですが、感性や情操を養うことは、主体性を育てる上で不可欠だと考えます。

学校教育目標に「主体性」を掲げる学校が減少

邵 小学校の学校教育目標に含まれる言葉を2002年と10年で比較した結果、「学力向上・学力定着」が大幅に増加する一方で、「自ら学ぶ力・自己学習力」「自立・自主・主体性」は減少しています(図)。小学校では主体性をどう捉えているのでしょうか。

黒田 「総合的な学習の時間」をはじめ、体験重視の教育に取り組んでいます。一方では「確かな学力」が向上していることを示すために、目に見える学力を高める傾向があるかもしれません。しかし、小学校教育においては、良い点数を取るための努力だけではなく、学習規律や学習方法など学びの基本をしっかりと身に付けることで中学校以降の学びにつながると思っています。

発達段階から見る主体性 低・中・高学年で異なる 主体性を育む支援

邵 主体性を育む方法は、発達段階に応じて異なると思います。どのような点に留意するとよいのでしょうか。

黒田 低学年は、自分が主役で周りから見られたい気持ちに強い時期です。認められ

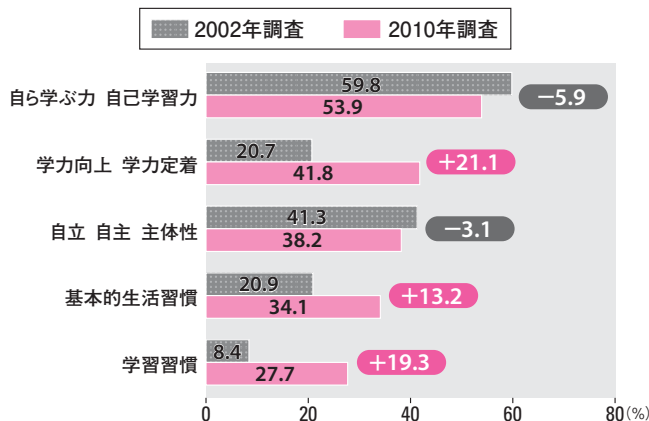
ベネッセ教育総合研究所
初等中等教育研究室 主任研究員

邵勤風

しょう・きんふう ○初等教育領域を中心に、子ども、保護者、教員対象の意識や実態に関する調査研究を行う。「学習基本調査・国際6都市調査」「第3回子育て生活基本調査」などを担当。



図 学校教育目標に含まれる言葉の経年比較(小学校)



*複数回答 *全34項目から抜粋して掲載
出典/ベネッセ教育総合研究所「第5回学習指導基本調査(小学校・中学校版)」(2010)

たり、褒められたり、注目されたりすると意欲が高まりますから、教師は「すごいね」「かっこいいね」など意欲が高まるように声を掛け、帰宅してもそれが持続するようにしています。

外山 幼児期から低学年にかけては、いろいろなことに興味を持つ時期であり、感性や情操をつぶさないことが大切です。そうすることで成長してからも幅広く興味を抱き、自ら取り組む姿勢につながります。

そして、中学年になると、ある程度のこと自分で出来るようになり、自信や有能感が高まります。子ども自身、与えられたことを出来ることは分かっていますから、次の段階として「自分で決めて取り組む」課題を設定するとよいでしょう。日本人は自分で物事を決めるのが苦手という指摘がありますが、小学校段階からそうした経験を徐々に積んでいくことが大切だと思います。

黒田 そうですね。中学年では、知恵や体力が付くことによつて芽生えた前向きな気持ちをはか表に出し、実現させるのが大事だと思います。例えば、体育や図工、ゲームなどで大いに盛り上がり、「次は勉強を頑張ろう」と、めりはりを付ける指導は有効です。また、小学校は社会性を育む場でもあります。この点で、中学年でのしつけや学び方、心の指導は大きな意味を持つと捉えています。この時期に、学級全体で学習をし、互いに高め合い、褒め合う経験をすると、高学年で豊かな

学び合いが生まれます。個々で頑張るだけでなく、集団での学びや友だちの考えも大切にすることを育て、高学年に進ませることが大切だと思います。

外山 高学年では、自ら目標を立てられるようになるので、目標を立てて頑張るように促すとよいでしょう。留意したいのは、高学年になると、自分と他人とを比較したり、周囲の目が気になったりして、理想と現実のギャップに悩み、有能感が低下し始めることです。思春期に差し掛かって劣等感も出てきますが、これは発達段階から見れば当然のことです。「自分だけ、どうして」という思い

が強くなるため、「あなただけが悩んでいるのではないよ」と温かく語り掛け、なるべく褒めて自信を付ける支援が大切です。

黒田 高学年になっても、周囲から認められることはうれいものです。本校では、高学年で自信を付けるために「ミニ先生」になって、知っていることを友だちに教える場を設けるなどしています。

● 主体性を育む指導

プロセスを褒め、 大きな目標と近い目標を持たせる

邵 いずれの学年段階でも褒めて認めることが大切だとよく分かりました。褒める際に心掛けたことを教えてください。

外山 褒めるポイントは必ずしも学習である

必要はありません。それぞれの得意なことを認めると、「やれば出来る」という有能感を持ち、それが学習意欲につながります。

黒田 同感です。子ども一人ひとりがどういう良さを持っているか、何が得意か、どのような思いを抱いているかということ、日常の会話や友だち関係の様子などを通して、把握するように努めています。

外山 褒める時、結果だけに着目しないことも重要です。点数ばかりを褒めると、学習目的が良い点数を取ることだけになってしまいます。そうすると、自分が理解することが学習目的だと捉えられず、すぐに答えだけを求めるようになるでしょう。結果を褒めることは外発的な意欲を高めるために有効ですが、それだけにならないように注意してください。

黒田 プロセスを大切にするという価値観がぶれてはいけないと思います。まず努力したことを認め、そこに結果が伴えば、なお良いという考え方を大切にしています。高学年では大勢の前で褒められることが恥ずかしいと思う子どももいますから、時には個々に褒めたり、保護者に褒めるように伝えたりします。

邵 自分で決めた目標に向かって頑張ることが、主体性を伸ばす上では非常に大切だと思います。具体的には、どのような目標を設定させるとよいのでしょうか。

外山 目標は「遂行目標」と「熟達目標」に分類できます。遂行目標は、「テストで良い

主体的に学ぶ力を育む——学び方の工夫で学習意欲を高める



主体性を育むためには、一見遠回りでも豊かな感性を養うこと、そして、面白い授業を工夫していくことが大切だという意見が交わされた

順位を取る」「相手チームに勝利する」といった他者との比較を前提とした目標です。一方、熟達目標は「九九を覚える」「二段跳びが出来るようになる」など、具体的な行動や技能の向上を目標とします。遂行目標はどれだけ頑張っても相手が上回っていれば達成できませんが、熟達目標は自分の努力次第で達成できるため、取るべき行動が明確で、意欲が低下しづらいという特性があります。先を見通せるようになる高学年では、大きな目標と近い目標を持たせることも効果的です。将来を見つめ、そのために今の自分に出来ることを考えるようにするとよいでしょう。

黒田 大きな目標と近い目標は、授業でも意

識しています。長い単元では最初に全体の見通しを持ち、目標に向かって1時間ずつ歩んでいくという意識で学ぶようにしています。

社会の中で自立して 自分らしい人生を歩む土台に

邵 自信を育むためには、一人ひとりの違いへの対応も必要だと思います。その点で気を付けたいことをお聞かせください。

黒田 指導案では「正解」「間違い」「問題が理解できない」の3段階に分け、それぞれの手立てを用意しています。授業では座席表を用いて一人ひとりの理解度を把握し、分からない子どもが多ければ小グループの指導を取り入れたり、自力解決が出来ない子どもにヒントカードを提示したりします。学習意欲が低い子どもには、実物を見せるなどして興味を持たせたり、「ここからなら自分で出来る」というところまで教師と一緒に進めたりします。大切にしてるのは、どのレベルであっても、最終的な答えを子ども自身に見付けさせることです。「何とか自分で答えを見付けなんだ」という強い思いがなければ、学習にならないからです。報われない努力を減らすために、学習方法を教えることも重視しています。もう少しで自力で解決できそうな子どもには、質問をされるまでヒントを出さないなど、学級内で支援の仕方を変えています。

外山 高学年になると抽象的な思考が出来る

ようになります。しかし、個人差が大きいため、子ども一人ひとりがどの段階にいるのかを見極め、状況によっては具体的なものを見せるなどの支援を行う必要があるでしょう。

邵 最後に、小学校で主体性の育成に力を入れることが、その後の成長にどう結び付くとお考えでしょうか。

黒田 子どもが成人した時に自立する土台になるという思いで取り組んでいます。社会に出るということは、守られてきた環境から出ることであり、そこには競争があり、醜いものや苦しいこともあります。そういう世界で生きていくためには、主体的に物事に取り組み力が必要です。主体性は、生きがいや感謝の心があつてはじめて成立するものだと思います。「人皆我が師」の思いを持ち、周囲の人のおかげで自分が学べるという感謝の心を持ち、コミュニケーションを膨らませてほしい。そして、いざとなったら孤独にも耐えられる強さも持つてほしい。そのような感謝の心と強さがあれば、例え悪い誘いがあつても、自分の道を外さずに生き抜けると思います。

外山 自分らしい人生を歩むために、主体性は不可欠でしょう。自分らしい人生とは子どもによって異なります。テストで良い点数を取るためだけの学力ではなく、自分らしい人生は何かと自分で考え、自分で決める力の支えになるのが主体性だと考えています。

邵 本日はありがとうございました。